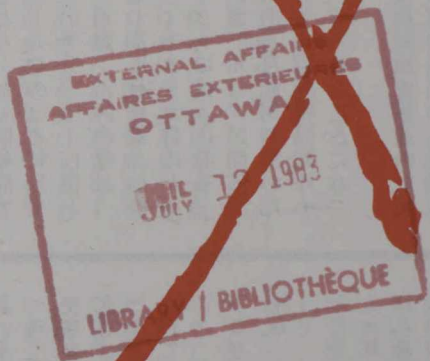


CA1
EA947
B71
#48 May 1983
DOCS



特集・日本におけるカナダ研究

1983年5月
No. 48
ISSN 0389-1852




トピックス——2

- 日本におけるカナダ研究・ブルース・バーネット——4
- 私のカナダ研究——5
- 日本カナダ学会の現状と展望・伊藤勝美——10
- カナダ文学会について・浅井晃——10
- カナダ研究に政府助成——11
- カナダ留学案内——11
- アンケート・諸大学のカナダ講座——12

- カナダ史点描・地下鉄道とアンクル・トム——14
- われら姉妹都市⑨ 箱根町&ジャスパー・田中喜一郎——15
- カナダ人物記⑨ ビクター・フェルドブリル——16
- 編集後記——16

Bulletin Canada

発行  カナダ大使館

TOPICS

テレテキストの実用試験 カナダの三都市で開始

カナダ通信省は四月十二日、CBC（カナダ公営放送）のネットワークを利用したテレテキスト情報システムの実用試験を開始した。この実験は「プロジェクト・IRIS」と呼ばれ、CBCのテレビ電波でニュースのほか、スポーツ、天気、買い物、金融、地域行事などに関する情報を送るもので、対象はCBCの制作センターのほか、モントリオール、トロント、カルガリーの一般家庭約五百か所。このテレテキスト・サービスは、いずれは全国で実施されることになっている。

テリドンに黒山の人 東京・通信機器展で

四月五―八日、東京流通センターで開かれた「コミュニケーションテクノロジー'83」展に、カナダは通信機器メーカーやソフトウェア会社九社が一つのブースにまとまって参加した。

マイテル社やノーザン・テレコム社の電子交換機、画面電話などカナダの先端技術製品に多くの注目が集まったが、とりわけ話題を

呼んだのが、ブースの半分を立体的に特設したテリドン・コーナー。カナダのビデオテクス（双方向映像情報システム）「テリドン」について、マルチスクリーンや大型モニター十数画面で銀行預金の移動や残高確認、住宅の間取りやインテリア設計の相談、案内広告といった用途を次々と例示したほか、絵の作成、文字の入力をわかりやすく実演。テリドンはニューメディアの中でも特に注目されているだけあって、展示場はいつも黒山の人だかりだった。



テリドンの特設展示場

今回参加したテリドン関連会社は、電子出版のインフォマート、端末機メーカーのノルバック、ソフトウェアハウスのジェネシス、ビクチャー・ペインターのケーブ

ルシエアの四社。実演は、最初の三社の総販売代理店となった三井物産が中心となって企画実行された。

三井物産は、財団法人大阪科学技術センターと共に、六月下旬、北米にビデオテクス・ミツシヨンを送る予定で、カナダではテリドンを中心に視察することになっている。

カナダ政府の新予算案 雇用・景気対策に重点

ラウンド大蔵大臣は四月十九日、景気回復を最重要目標においた連邦予算案を下院に提出した。

八三年度予算案の中心は、雇用状況の改善をねらった、四年間で総額四十八億ドルにのぼる特別景気対策費。その半分、二十四億ドルは、空港や道路、港湾の建設、あるいは船舶や高度技術製品の調達など、全国でおよそ百件の公共事業プロジェクトに投入される。残りの二十四億ドルは、民間部門における投資および雇用刺激のため、企業に対する投資税控除枠の緩和などに当てられることになっている。

大臣はまた民間投資促進のための特別景気回復投資基金（三億ドル）および輸出促進のための特別基金（一億八千万ドル）の創設を発表した。

こうした一連の景気回復・雇用創出策に要する財源は、インフレが再燃しないよう、連邦販売税の

一ポイント引き上げによってまかなうという。

カナダ経済は、主要先進工業諸国、特に米国の景気後退もあって、八二―八三年度（八二年四月―八三年三月）の財政赤字が二五三億ドル、実質国民総生産が前年比四・八パーセント減、失業率が年平均一・一パーセントと、全般的に振るわなかった。ラウンド大臣によると、「リセッション（景気後退）は底入れし、金利も低下した。企業や消費者の自信も強まってきた。景気回復はすでに始まっている」という。しかし、こうした特別景気対策にもかかわらず、今年の年間平均失業率は二・四パーセント、来年も一・四パーセントと高い水準が続くそうだという。

八三―八四年度の実績GNP成長率は二・三パーセントと、プラスに転ずる見込みだが、財政赤字は三一三億ドルに達するものと予測されている。

クレチエン・エネルギー相が来日 石炭、LNG供給などで話し合い

ジャン・クレチエン・エネルギー・鉱山・資源大臣が四月十六日に来日、石炭、LNG、ウランなどの対日供給、キャンドウ炉、世界の石油事情などについて、日本の通産・外務両大臣および鉄鋼・エネルギー関係経済人と話し合った。

このあと同大臣は記者会見にのぞみ、大要次のように語った。

クレチエン大臣



一、（ドーム社の経営危機について）昨年九月、連邦政府とカナダの銀行団がそれぞれ五億ドルづつ、合計十億ドルの増資をするという、いわゆる「安全網（救済策）」の申し入れをした。これは（ドーム社）の債務比率を減らすというもので、この提案はまだ生きています。ドーム社では、外国銀行と（債務の返済繰り延べについて）話し合いがつき次第、この件について株主に了解を求めることになろう。

二、（LNGの対日輸入について）計画は予定通り進んでいる。あとはパイプラインなどの建設に関する行政上の処理やいくつかの認可事項が残っているだけだ。

一、（北極での石油開発について）最近の世界的な石油過剰にもかかわらず、北方カナダで積極的に石油探索を続ける、また国内需要を満たして超過分がでたら輸出するというカナダ政府の方針は変わっていない。われわれはものごとを長期的に見ており、またエネルギー自足はきわめて重要だからである。

日加が包括事前同意制に合意
使用済み核燃料の再処理で

カナダから日本に輸出されたウランの使用済み核燃料を日本で再処理したり、再処理のため海外に持ち出す場合、これまでは一件ごとにカナダの事前承認が必要だった。

たが、今後は包括的な事前承認で事足りることになった。

カナダと日本が原子力平和利用に関する協力協定を結んだのは一九五九年。この原子力協定は一九八〇年九月に改正され、核拡散防止のうえから使用済み核燃料の再処理および再処理のための海外移出については、そのつどカナダ政府の承認が義務づけられた。

カナダが「包括事前同意制」を認めたのは、スウェーデンとユーラトム（欧州原子力共同体）に次いで日本が三番目。日本はカナダ第一のウラン輸入国であり、今度の合意で、日本は核燃料サイクル作業をより計画的に進められるようになり、エネルギー安全保障に役立つものとみられる。

カラシから食用油 カナダ農務省が研究

マーガリンやマヨネーズに使う食用油の原料となる油糧種子としては、大豆、綿実、落花生、なたねなどがよく知られているが、カナダではいま、カラシから食用油を採る研究が進められている。

カラシがこれまで食用油に利用されなかったのは、人体に有害なエルシン酸を含んでいるため。最近になって、オーストラリアの研究者がエルシン酸含有率の低い新しい品種のカラシを開発した。カナダ農務省のサスカトーン研究所では、これを一歩進めて、カラシの粉末油かす（ミール）を飼料

にする方法を研究している。

カラシは硫黄分の多いグルコシノレートとを大量に含んでいるため、そのままでは飼料に適さない。そこでサスカトーン研究所では、グルコシノレートを取り除くのに効果的な方法を開発したほか、グルコシノレートを含まない新品種の開発に取り組んでいるという。

（カナダはすでに、なたねからエルシン酸とグルコシノレートを除去するのに成功した。新品種はキャノーラの名で、食用油および飼料用に西部カナダで広く栽培されている。）

カラシはなたねに比べて干ばつに強く、乾燥しても砕けにくいため、なたねの栽培に不適な場所でもよく育つ。昨年の作付面積はカナダ全体で八万ヘクタールだが、油糧作物に転換できれば、生産量は大幅に増えるものと予想される。

カナダ講座担当にカーティス教授

今年度のカナダ研究講座担当教官として、ラバル大学（ケベック州）のケネス・S・カーティス教授が着任した。

教授（写真）はオンタリオ州ロンドン出身で、ヨーク大学グリーンドン・カレッジで学士号（政治学、経済学）、英国のサセックス大学で修士号（国際政治、経済学）、フランスのヨーロッパ経営研究院で経営



修士号、バリ政治学院で博士号を取得、バリ大学などで講師をしたあと、一九七四年からラバル大学で政治学部教授の地位にある。

すでに筑波、慶応、東京の各大学でカナダの政治や経済について講義しており、九月からは国際基督教大学でもカナダ講座を担当する予定。

義足でも楽にジヨギング オンタリオで開発中

ジヨギングのできる義足があれば——オンタリオ州ハミルトンのマクマスター大学では、「片足ランナー」として知られた故テリー・フォックスの要望を取り入れたジヨギング義足を開発している。

がんで右足を失いながらがん研究費募金のため全国縦断マラソンに挑んだテリー君は、ハミルトンに立ち寄った際、マクマスター大学のマーテル教授に、健康な方の足によく運動する義足があればもっと楽に走れるのに、と改善を訴えた。

テリー君はその後、志半ばにして倒れたが、マーテル教授のチームは、彼の望みを何とか叶えられないかと、片足の人でも楽に走れるような義足の研究を続けてきた。

教授によれば、新しい義足は丈を短くし、体重がかかっている間は足元がぐらつかず、また膝も自由に曲がるように設計されているため、普通の人とほとんど同じ走り方ができるといふ。

アジア・太平洋財団の創設へ カナダ政府、組織委員会を設立

アジア・太平洋地域に対するカナダ国民の認識を高め、カナダの同地域との関係を促進していくための機関として構想されていた「アジア・太平洋財団」の組織委員会がこのほど発足した。委員長はカナダ・ハーバー・ブレイス社のジョン・ブルック副会長。

アジア・太平洋財団は、一九八〇年にバンクーバーで開かれた第一回「環太平洋関係を考える会議」で提案されたもので、カナダにおけるアジア・太平洋地域への認識と理解を深める機関として経済学界、政界から大きな支持が寄せられた。

組織委員会の運営費は連邦政府が全額負担するが、財団発足後は連邦政府が運営費の半額、残りを州政府および民間の拠出金でまかなうという。

新生児死亡率が五年で半減 マニトバ州で新しい手術法

妊娠中の胎児の異常を発見し、胎内に入ったまま手術する——マニトバ州ウイニペグの専門家チームは、特殊カメラで母体を走査しながら胎児を診察あるいは手術する方法によって、同州における新生児の死亡率をここ五年間で半減させることに成功した。

マニトバ大学のフランク・マニ

ング博士らによって開発されたこの方法は、超音波・高感度のスキヤニング（体内の動きを特殊カメラで走査し、異常な部分を発見しようという診断法）を羊水穿刺手術に取り入れたもの。これまで手さぐりでやっていた胎内の手術が、超音波の「道案内」で注射針を母親の子宮壁を通して正確に胎児の腹に穿刺することができた。これによって、例えばRh因子の不整合を避けるための子宮内血液交換が、きわめて安全にできるようになった。マニング博士を中心とする周年期（出生周辺期）専門家チームは、これまでに、この方法で何百件もの胎内輸血を行なった。外国から送られてくる妊婦も多いという。

B C州選挙、ベネット政権が再選

ブリテイッシュ・コロンビア州で五月五日、州議員選挙が行なわれ、ウイリアム・ベネット現首相の率いる社会信用党が三十五議席対二十二議席で野党の新民主党を破り、七五年、七九年に続いて三たび過半数を制した。

大使館案内

●「カナダ・ジュエリー展」六月二十一—二十三日、東京・カナダ・トレード・センター

●「ユニバーシアード83」七月一—十一日、アルバータ州エドモントン

日本におけるカナダ研究

政府が各種の援助

カナダ大使館広報部部長 ブルース・バーネット

な友好関係を着実に発展させるためにより深い認識が必要となっている。カナダとカナダ国民についての理解なくして、ある政治上、経済上の決定がなせ出てきたのかを理解するのは難しい。例えば、カナダを動かしている諸要因は、米国のそれとは異なる。カナダ人に米国人と同じように振舞うことを期待するのは理に合わないし、はっきり言って不可能である。

だからこそカナダ政府は、日本でカナダについての認識を高め、あるいは深めるためにできるだけのことをしたと考えている。両国の研究・教育機関の交流を盛んにすることも、その大切な一環である。

カナダ政府の学術交流計画には、大別して次の三本の柱がある。(1)主として大学院学生を対象とする奨学制度 (2)大学教師や研究者に対する助成 (3)日本の大学におけるカナダ研究講座の育成援助。

日本ではカナダについての認識と理解を深めるために、カナダ政府はさまざまなプロジェクトを実施している。その中でも、学術関係は非常に重要な位置を占めている。

日加両国にとって、お互いが重要な国であることは言うまでもない。両国の関係は、わずかな一般的知識で事足りりという段階をととの昔に過ぎ、現在、緊密

研究団体への助成がある。

カナダ研究助成計画は、日本の大学でカナダ講座を盛んにするには優秀な研究者の確保が不可欠だという認識のもとに、三年前に発足したものである。すでにカナダに関する関心も知識も十分備えておられる研究者も多いが、カナダ政府はその方々を含めて、より多くの研究者にカナダを直接訪れてもらい、新しい知識を仕入れ、また研究を深めてもらう方策の必要性を感じた。

助成の対象となるのは、すべてカナダに関する何らかの研究計画に携わっている人である。自然科学者ももちろん、カナダに研究に来ているが、それは大学間で直接締結されている別個の交流計画によるものである。

カナダ研究助成計画の助成以外にも、カナダ大使館では日本で入手しにくい資料や書籍を提供したりして研究を手助けしている。同様にいくつかの大学にも図書への寄贈を行なっている。

日本におけるカナダ研究にとって最も重要な出来事のひとつは、一九七七年の日本カナダ学会（発足当時はカナダ研究会）の設立であろう。日本カナダ学会にはさまざまな分野の研究者が参加しており、年次研究大会や研究会、講演会を開くなどの活動をしている。カナダ大使館では、日本カナダ学会とカナダ文学会（一九八二年設立）に助成を行なっている。

カナダ政府が力を入れている三番目の柱は、日本の大学におけるカナダ講座の育成。両国政府は、日加文化協定でそれ

ぞれの大学で相手国の研究を推進することになっており、日本では現在、筑波大学にカナダ研究講座が置かれてカナダから毎年客員教授が派遣されている。今年四月にケネス・S・カーティス博士が着任し、同大学院地域研究科で教えている。同博士は筑波大学のほか、東京大学、慶応大学、国際基督教大学でも講義している。

政府レベルの学術交流とは別に、北海道の北海学園大学ではカナダ人教授のポストを設け、二年前からレスブリッジ大学（アルバータ州）と姉妹校となって教授を交換しあっている。また関西では、関西学院大学がカナダ人教授を招いており、この九月に三人目の教授が着任する。

日本の大学では、多くの優秀な日本人研究者がカナダを専門に研究しており、その数は次第にふえてきている。また、それらの人々を介して、カナダ人研究者が招へいされたりしている。例えばウィンザー大学のアーレントラウト教授が、二年間の予定で筑波大学に招かれたのも、こうした先生方のおかげである。

これらのほかにも、日加間の学術交流の進展を示すプロジェクトや計画はたくさんあるが、以上でその進展の方向を概略理解いただければ幸いである。

また、カナダ政府は、こうしたプロジェクトをさらに拡大・充実するために、常に新しい方策を求めている。カナダの大学を卒業した日本人が集うカナダ大学同窓会（仮称）の設立なども、一案であろう。

私のカナダ研究

カナダ文学

一老兵の述懐

平野 敬一



一九三〇年代前半にカナダのバンクーバーで小学校時代を送ったという環境の偶然から、私はカナダとカナダ文学に対する関心と愛着を早くから抱くようになった。インディアンを引く詩人ポリーリン・ジョンソンの詩編「わたしの權がうたう唄」などは教室で暗誦させられたせいもあり、今でもカナダの自然と文学に対する私のイメージの土台になっている。

当世風にいえば「帰国子女」の一人として日本へ帰った私は、その後順調(?)に日本で教育を受け、兵隊にもとられ、戦後は大学で英文学を専攻することになったが、少年時を過ごしたカナダに対する思いは断ち難かった。英文学を勉強しながらも、私は英米以外の国の文学をまったく視野に入れようとしないう偏狭な日本の「英文学研究」に当然不満があった。それで自分なりにカナダ文学の勉強に

志すようになったわけだが、その時期はカナダで「新カナダ文庫」(マクレランド&スチュワート社)の発刊をみたころ(一九五七年)とほぼ一致していたように覚えている。六〇年代に入って私にもカナダへ留学する機会が回り、漸く本腰を入れて勉強することができるようになった。当時は、カナダの大学においても、カナダ文学研究は黎明期。関係資料も、講座も、専門家も少なく、今からみるとウソのようなお粗末な研究環境だったが、関係者一人ひとりにパイオニア的な若々しい情熱があつて、私などは大いに得るところがあつた。

カナダ本国においてさえ黎明期だったカナダ文学研究が、日本でおいそれと育つはずはなく、日本の大学でカナダ文学研究を定着させることの難しさを、私はいやというほど思い知らされたものだった。しかし、これは一昔も二昔も前の話。現在では、日本でも、カナダ文学に関心を寄せる人びとの数は着実に増え、日本カナダ学会の一環として今までも時々研究報告がなされてきたが、ようやくささやかながら、カナダ文学会という形で発足できるところまで来た。去る二月に開かれたこの文学会の第一回例会で、ポリーリン・ジョンソンの詩についての研究発表(阪南大学・渡辺昇氏)がなされたの

は、私にとってはとりわけ感銘深いことだった。

とはいっても、英米文学研究に比べると、手軽に本や資料の入手ができないうし、学界や出版界の関心は低く、大学に専門のコースもほとんど開設されていないというふうには、カナダ文学を勉強する上での客観的条件の不利は依然として否めない。私などの古い世代は、こういう条件の不利を、いわば天与のこととして受入れてきたものだが、私より若いこれからの研究者は、そんな受動的対応には満足しないに違いない。(明治大学教授)

植生生態学

思い出深い各地での調査

小島 覚



植生生態学の研究を通じて、私とカナダとのつきあいは長い。一九六七年、ブリティッシュ・コロンビア大学大学院の学生として初めてバンクーバーの土を踏んで以来十六年、一貫してカナダは私にとって良い研究の場と興味ある素材を提供してくれた。

ブリティッシュ・コロンビア大学在学中は、植物学科のクラジナ教授のもとで、太平洋沿岸にあるバンクーバー島の西岸性針葉樹林の森林生態を研究した。アメリカツガ、ダグラススモミの巨木が優

先する、世界でももっとも生産性の高い森林のひとつである。ひと口に針葉樹林と言っても、決してそれは一樣なものではなく、その場その場の局地的環境の違いに対応して植生は複雑に変化し、またその下に発達する土壌も変化する。では、どのような森林植生がどのような環境のもとに発達しているのか、土壌の特性が植生の分化や森林の生産性にどんな影響を及ぼしているのか、その点を明らかにするのが、その時の研究の目的だった。

ブリティッシュ・コロンビア大学での課程を終わつた後、サイモン・フレージャー大学に移り、カナダ北部、ユーコン地方の植生を研究することになった。中部ユーコン地方は北米大陸における森林の北限にも近く、森林とツンドラが複雑に錯綜し、一種独特の景観が発達しているところである。おびただしい蚊の大群に悩まされつつ、一面のヤチ坊主が発達するツンドラの中を難渋しい歩いたのも今は懐かしい。

その後、エドモントンにある森林研究所でロッキー山脈の植生調査、アルバータ州の生態区分、森林立地分類等の研究に従事したが、その間アルバータ州南部の広漠たるプレーリー大平原、ロッキー山脈中腹部のうっ蒼たる山岳性針葉樹林、そして樹木限界上部に展開する高山帯、さらに州の北部に果てしなく広がる北方系針葉樹林等、さまざまな自然に接する機会に恵まれた。カナダは現在なお比較的よく自然が保存されている、世界でも数少ない国のひとつである。

こうして、カナダでの研究生活の中で、研究上の思想的基盤から方法論、そしてさまざまな知識や経験等、私がかナダから得たものははかりしれない。それに、カナダの自然は私にとっていつまでもこの上なく魅力のある世界なのである。(富山大学教授)

政治学

米加の平等主義の差に関心

阿部 斉



私はもともとアメリカの政治に強い関心を寄せていた。とくに、アメリカとヨーロッパの差異がどこから生じたかを明らかにすることは、今でも私の主たる関心事である。学問のジャンルでいえば、アメリカとヨーロッパを比較政治学的に考察することが、私の課題であるといつてよい。

ただ、比較政治学的な文脈としては、ほかにアメリカをカナダやラテンアメリカと比較する方法もある。一九六六年から二年ほどハーバード大学で勉強していたときの私の先生であったルイス・ハーツ教授は、アメリカやカナダなどヨーロッパから派生した文化を持つ国について、独自の理論を構築していた。その頃からハーツ教授の影響もあって、私もアメリカとカナダの比較に強い興味を感じるよ

うになった。

カナダとアメリカは地理的に接近しているながら、政治制度や政治文化の上では、多くの違いを示している。カナダは議院内閣制であるが、アメリカは大統領制である。連邦制をとっている点では両国同じであるが、アメリカの state とカナダの Province はけっして同じではない。政党の組織形態も異なるし、アメリカが排他的な二党制であるのに対して、カナダには有力な第三党あるいは第四党が存在する。こうした差異がなぜ生じたかを明らかにすることで、アメリカとカナダのそれぞれの政治的特性も明らかになると思われる。

しかし、これまで私が最も強い関心を寄せてきたのは、アメリカにおける民族集団相互間の対立が、政治的統合を脅かさなかったのに対して、カナダにおけるイギリス系とフランス系との対立が、深刻な政治的分裂を招いたのはなぜか、という点であった。この点については、一九七一年の『政治学年報』にささやかな論文を寄せたこともある。

今の私の最大の関心事は、アメリカとカナダの平等主義における差異である。アメリカが世界で最も平等主義的志向の強い国であることは、改めて指摘するまでもないであろう。家族の解体、モラルの低下、犯罪の激増など、最近のアメリカ社会の顕著な傾向とみられるものも、結局は平等主義の所産といつてよい。アメリカに比べて、カナダ社会の秩序は高度に安定しているが、それは平等主義化

の差異に基づくものであろうか。それとも、他の原因によるものであろうか。平等主義社会の矛盾は、わが国の社会でも徐々に表面化しているだけに、私はこの疑問に是非答えたいと考えている。(筑波大学教授)

ケベック問題

「汝、カナダと共にあるべし」

伊藤 勝美



「スイスのジュラ地方のフランス語系住民のあいだに分離運動がみられる。カナダのケベックにもフランス語系住民がいる。後者について研究したらどうか」。ほぼこのような示唆を恩師木下半治先生からいただいた。約十数年前のことである。当時「大国中心主義」に毒されていた私にとって、まさに晴天の霹靂。「ジュラ」、「カナダ」、「ケベック」などは、当時の私の研究生活において全く縁遠いものであった。

「何故カナダか」、「何故ケベックを」と思い悩んだ私は、木下先生の紹介でカナダ大使館の大窪憲二氏(現在日本カナダ学会顧問)にお目にかかり、「集中講義」を受けることになった。このような「見える手」に導かれて、terra incognita(未知の国)であったカナダは次第に身近な存在になり、カナダ研究に第一歩を

踏み入れることになった。

私のカナダ研究の動機は偶然的・受動的なものであったが、今にして思えば、木下先生の示唆は、種々な点からみて歴史の流れに沿うものであった。三年余の手探りの勉強ののち、一応『フランス系カナダ問題』を書き上げたが、この段階でカナダ研究から撤退するか、これをサイド・ワークにするか、それとも今少し深入りするか、と思案していたが、ある夜、モンカルム、ウルフ両将軍(注)の亡霊が現われ、告げて曰く、「汝、カナダと共にあるべし」と。結局、イギリスによるニュー・フランスの「征服」以後今日にいたるまでカナダの政治を揺り動かしてきた「フランス系カナダ問題」(ケベック問題)、そして「少数民族問題と近代国民国家」から逃れ得ないでいる。

私はこれ以外に、カナダについて、地域主義、政党制、憲法改正論争(史)、対外関係、ナショナリズムなどに手を出してきたが、政治文化、先住民族問題等とともにこれらのテーマをさらに追求し、カナダ政治の総合的・体系的把握に努めていきたいと思っている。さらに、スイス、西ドイツ、オーストラリア、アメリカ合衆国、それにカナダの連邦制について比較研究をしたいと考えている。

まだ道は遠い。日暮れを気にせず、「急がず、休まず」で行くほかないと思つて今である。

(注)一七五九年のケベック攻防戦で、モンカルムはフランス軍の司令官、ウルフはイギリス軍の司令官であった。両

者ともこの戦いで死亡。

(近畿大学教授)

カナダ史

魅力は「割り切れなさ」

大原 祐子



「カナダ史には、一つの解釈は存在し得ない。イギリス系カナダ人とフランス系カナダ人とは、カナダ史の解釈がまるで異なる。」一九七〇年の秋、ブリティッシュ・コロンビア州のヴィクトリア大学で、生まれて初めてカナダ史概説の講義を受講した際、カナダ史学史を導入部とされたE.R.フォークス先生(現ニュー・ブランズウィック大学)のアプローチは印象的であった。ニューレフト史学を含めて明快な解釈を呈示するアメリカ史学史にそれまで親しんでいた私にとって、それは考え方の根本的な転換を迫るものであった。思えばあれはカナダ史学の泰斗D.G.クレイトンによる一九六九年六月のヨーク大学における講演「セント・ローレンス帝国の衰退と没落」の後のことであり、フォークス先生の苦渋に満ちた声音も(後にはそれが彼のくせであることも判ったが)、この講演によく対応していた。

日本においてカナダ史に「市民権」を与えたのは、立教大学で私が教えるを受

けた清水博先生であると思っている。先生は、卒業論文にオレゴン問題を取り上げたのが機でカナダ史に興味をもたれたそうであるが、ケアレス著『カナダの歴史』の共訳者になって下さった際、「アメリカ史の理解のためにも、カナダ史を知ることは予想以上に役立つのである」と書いて下さった。清水先生の御教導により私がカナダ史に興味をもつようになったのも、このアメリカ史との比較という視点からであった。そうして気が付くことは、例えばカナダでは「るつぽ」現象があまり問題とされなかったこと、あるいは多言語教育が一〇〇年以上も前に法制化されていたこと等、カナダがアメリカの先を行く、或いは行かざるを得なかった国であったということなのである。これは簡単に言い過ぎているかもしれないが、世界が多種多様で柔軟な思考に耐えなくては生き延びていけない現在、いわゆる大国の歴史の中よりもカナダ史には学ぶべき先例を多く見出すことができるかと考えているのである。誤解を恐れずに言うならば、私達日本人は二律背反的思考に耐えるのが苦手であるように思う。「ナショナルリズム」と言えば幾つかのナショナルリズムの存在は認めるとしても、その中からどれか一つを選ばなくては、と思うのではないだろうか。カナダのよりに民族別、地域別にナショナルリズムが存在するとなると、それはナショナルリズムとは言えないというのはまだしも、それではカナダは国家の態をなさないとはい勝ちなのではないだろうか。

というのが私の偏見であるならば幸いである。カナダ史を学ぶ上で難儀でもあり魅力でもあるのが、この「割り切れなさ」なのである。日本のカナダ史研究者はこれまでは私のように「転向組」が多かったが、最近はいきなりカナダ史に取付く若い方々が出てきた。彼らは全く異なるところからカナダ史の問題と魅力を見出すのではないだろうか。(東京大学助教授)

都市・文化地理学

国土の広さの感じかた

正井 泰夫



カナダは広大な国である。九九八万平方キロという広さは、隣の超大国アメリカの九三六万平方キロをかなり上回り、ソ連に次いで世界二位である。カナダ南部の東西差は五、〇〇〇キロであり、アメリカの四、〇〇〇キロより一、〇〇〇キロも長い。

カナダ南部のアメリカ沿いの幅四〇〇キロの範囲には、カナダ国民のほとんどが住む。とはいっても、二、〇〇〇万人程度であり、東京大都市圏人口よりも少ない。では、この幅四〇〇キロの土地は、いたるところ無人の土地なのだろうか。私は、何本かの鉄道を乗り継いだりして、この東西五、〇〇〇キロの大陸横断

旅行を、これまでにほぼ完成させた。鉄道距離では六、〇〇〇キロぐらいであろう。その沿線は、どこまでも続く山、森、畑という表現が決しておかしくないほど、日本人の目には雄大である。だが、無人の土地というには、あちこちであまりにも人間の影響が見え過ぎる。北極圏はいざ知らず、少なくとも農耕可能な土地の大半は、もうすでに人の住むところとなっている。

それなのに、カナダを旅する人は、カナダの人の少なさに驚ろき、土地の広さを語る。ところが太平洋岸から大西洋岸まで旅するということは、日本でいえば、稚内から鹿児島まで旅をするようなものである。この距離は直線で二、〇〇〇キロ、鉄道では三、〇〇〇キロである。人口一〇〇〇万の沖繩を加えると、さらに一、〇〇〇キロ延長しなければならぬ。だが、日本を旅する人は、日本を狭い国だと実感しがちなのである。それはなぜだろうか。

日本国内の旅行は大抵東京から始まる。そうでなければ大阪である。東京も大阪も、「狭い」日本のほぼ真中にある。そして、車窓に展開する景色は、国土の二〇パーセントしかない平野部の超過密居住景観なのである。片道一、〇〇〇一、五〇〇キロがマキシムで、しかも、人口密度の高い所だけを見て(人口密度の少ない山地はあまり見ないで)旅をするので、日本は狭いと感じるのである。広いカナダでも、車窓から見える範囲は有限であり、日本とあまり変わらない。

山の無い地平線で見ることがブレイリー

ーでは多いが他では山や丘が見え、視界がさげられる。しかし、カナダの中心都市は、国土の一方に偏在しているのが、カナダの国内旅行は距離をとれないがちなのである。主要都市がみなウィニペグ辺にあり、カナダの地理に関する本がみなそこで出されたら、少なくともカナダの広さについての心理的感覚は違ったものになったに違いない。(筑波大学教授)

フランス系カナダ文学 興味深い未開拓研究分野

西本 晃 二



「カナダが英仏両語を公用語として、多言語国家であるということは、日本でも近年、ケベックの独立運動があったことも手伝って、以前よりよほどよく知られるようになってきています。それでもパーティーなどで、私が英語でなくてフランス語で話しているところへ、日本の方が来られ、『お国はどこですか?』と聞かれる。『カナダ人です』と答えると、『アレツ』という顔をされ、『そっそっ、カナダではフランス語も話すんでしたね』という返事が返ってくるのがよくありますね。これは、筆者がよく知っているフランス系カナダ人の学者の言葉であ

る。

カナダにおけるフランス系社会の地位について、それも日本に限らず、広く一般にもたれていない認識を、右の言葉は端的に表わしている。すなわち、いつもは忘れられているが、何か機会があると思いついて出してもらえぬ程度だということである。

たしかにフランス系カナダは、その内向的——日本も、その点では、開国までは完全に閉鎖的であった——な性格の故に、長い間、北アメリカ、いなカナダの文化や社会の中でさえも、自己の存在を主張したり、他に強い影響を及ぼしたりする度合いは少なかったかも知れない。それも北アメリカにヨーロッパからの本格的な接触が始まった十六世紀前半から、アメリカの独立戦争の結果、独立に同調し得ない植民地の忠誠派が、上部カナダ(オンタリオ)に移住する十八世紀末まで、二世紀半にわたって、カナダで人口的に圧倒的多数を占めていたにもかかわらずである。

しかし英領編入以後二世紀半を経た今日、十六世紀大航海の時代にフランスが獲得した海外植民地のほとんどが、合衆国南部のルイジアナまで含めて消滅してしまつたのに、ケベックからアカディアの故地(現右のノヴァ・スコシア、ニュー・ブランズウィック)にかけてのみ、フランス系の言語と文化、社会が、いろいろな圧迫に耐えて生き残つたのは、すでにそれ自身が、一個の目覚ましい現象である。いわんや近年、「静かな革命」や過

激行動を経て、政治的独立運動を展開する

など、フランス系とはいってもヨーロッパのフランスからは独立し、またカナダの一員といつても英語系とは別の途を切り拓いて行こうという意欲が、政治・経済・言語といった実際のな面ばかりではなく、文学や芸術にいたるまで、社会のあらゆる分野で活発に表明されたこととなつて、まさに興味津津たる未開拓の研究領域である。ジャック・カルチエからフィリップ・オーベル・ド・ガスベ、ランゲからガブリエル・ロワ、アンヌ・エベルからアントワヌ・マイエまで、フランス系カナダ文学の諸作品を読むと、カナダ東部に根を下ろした社会を護りつづけて行つた人々の息づかいが伝わってくる。(東京大学教授)

政治経済学・政治社会学

政治・経済の根本過程に焦点

ケネス・S・カーティス



政治的、経済的経験の底流をなす根本的プロセスの分析が、私の主たる研究テーマである。大学教師になつて以来、私の研究は政治経済学および政治社会学の領域に集中している。

政治経済学の分野では、一九八一年、私は経済的条件と社会的条件が合致した地点で発生し、そこで産業政策が形成さ

れる政策空間を構成する枠組の研究に取リかかった。この研究は、理論、経験、分析の三段階に分かれており、現在は理論的段階、すなわち産業政策に不可欠な戦略的環境の二つの重要側面——経済的競争の側面と社会・政治的、対立的側面——の性質と形を研究しているところである。この二つの重要側面(領域)の特徴として、二つのはっきりと相異なる意思決定および資源分配モデルが考えられる。

この研究の第二段階では、経験的データに基づき、国有部門、規制部門、競争部門という三つの主要経済部門について産業政策に表われた戦略的利害に対する認識を分析するつもりである。第三段階では、産業政策策定に特徴的な経済的、社会、政治的トレードオフの過程を調べる。これはカナダと日本の異なつた経験を主要テーマとする比較研究となる。

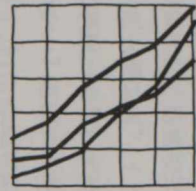
政治社会学の分野では、ここ十年以上カナダにおける政治文化の基盤に関する研究をしている。たとえばナショナル・アイデンティティの発展と感情、ナショナル・アイデンティティの構造と内容、ナショナルリズム(特にフランス系ケベックにおけるそれ)のさまざまな要素の出現に関する分析を行なつてきた。

現在、カナダの政治文化が取れんする二つの側面、すなわち、政治的論考のパターンの発展と深刻な経済危機時における政治権力への集团的服従の維持、について分析を進めている。(ラバル大学教授、在日カナダ研究講座担当客員教授)

経済学

カナダ経済の構造的特質

飯澤英昭



私がカナダ経済を研究の対象に選んだそもそものきっかけは、一橋大学の山澤逸平教授の示唆に負うところが大きい。

当時、外国貿易とくに輸出の経済発展に果す役割を分析するうえで、カナダがひとつのユニークな事例を提供しているように思われた。以来、カナダを輸出主導型発展モデルの実証に用いるという視角からはなれて、カナダ経済を史的にフォローしていくうちに、次第にカナダ経済に固有の構造的特質なるものに強い興味と関心を抱くようになった。

その関心事のひとつはこうである。経済の発展過程で、カナダが意識的に採用し続けてきた外資（企業の所有と支配を招く直接投資）への寛容な態度と、それに伴う産業の広範囲にわたる外資支配を許容しながらそれをテコにして工業国家の建設を進めてきたカナダの工業化政策は、ほぼ同時期に工業化へのスタートをきった日本の、外資に対する堅固な閉鎖的態度と比べてとき、きわだった対照を示しているといった点である。今日、カナダが行き過ぎた外資支配からの脱却を

はかろうとしていているのに対し、その間、着実に国際競争力をつけた日本が外資に対し門戸を開く方向に動いているという事実は、両国がそれぞれ正反対の極から出発しながらも、共に自律的なよりバランスのとれた国民経済の形成を志向していることを示している興味深い。

ところで、こうした生産要素の国際的開放度に関する両国の異なった対応の仕方は、一体何に起因するのであろうか。

それは、究極的には生産要素の賦存状態といった客観的条件の相違に求められるべきであらうか。あるいは、すぐれて主體的な意味において、両国の国民国家形成の歴史的経緯の相違に求められるべきであらうか。

私は、最近、こうした設問に接近するための基礎的作業として、カナダ国内のアカデミックな世界に存在する生産要素の国際的開放度に関するさまざまな考え——大きくは、完全開放を唱えるコンチネンタリストそれに対峙するナショナルリストの二大集団に分類されよう——のよって立つ論理構造とその系譜の分析を進めていくところである。

私は、こうしたカナダ研究を通して、「国民国家」とか「国民経済」あるいは「ナショナルリズム」とかいった概念の具体をあらためて問い直す必要があると考えており、また同時に、単一民族国家日本が、今後国際社会で協業していくうえで、カナダの示す事例から多くの教訓を学びとりうるものと確信している。

（山形大学助教授）

海洋開発

望まれる技術交流

小林 浩



● 氷海開発のバイオニア

先進諸国で海洋開発が提唱されてからすでに十余年となるが、その中で最も発展した分野のひとつに海洋石油開発がある。

海洋からの石油生産は、すでに石油全体の主要な割合を占めているし、建設サイドからの海洋開発もかなりの部分が石油に関連したものになっている。

このように、石油開発のフロンティア・エリアは海洋へ進展し、それが更に深海域へ、また氷海へと拡大されてきているのが現状である。

すでに、カナダの北極海沿岸海域においては、長期の見通しのもとに莫大な投資をして、氷海の石油開発が進められている。今世紀末か来世紀初めには大海洋油田地帯となるとも言われており、氷海開発のバイオニアの息の長い計画には驚嘆せざるを得ない。

昨年、北極海（ボーフォート海）の石油探掘現場を見学した際、広大な氷原に立って考えたことは、人跡未踏の地で石油開発を推進する彼等の原動力は何であ

らうかということであった。勿論、近年の石油事情の緊迫傾向に対する彼等の先見性もあるが、それに加えて、新しいことに本能的に立ち向かっていく彼等のバイオニア精神であらう、と思ったのである。

● 氷海技術

氷海における石油開発では、過酷な自然環境条件下での施設建設・操業が要求される。

カナダでは設計施工上、あるいは操業上の創意工夫、技術開発などが行なわれ、これを克服してきた。これには全く敬服する。わが国では従来はあまり注目されなかった氷海の石油開発、そして建設サイドからすれば、そのための氷海技術、海洋構造物の研究開発であるが、現在その必要性が痛感されつつある。

カナダにおける氷海技術は現実の石油開発の仕事を通して、学界、産業界に浸透し、裾野の広さを示している。わが国のカナダ研究の重要な分野である。

● 技術交流

「実践に裏付けされたカナダの氷海技術と、日本の各分野の技術との互恵の交流が望まれる。技術交流は単なる商取引に終わってはならず、技術を使用、育成し、成果を両国で享受するものでありたい。」これは、昨年カナダを訪問した際のカナダのお役所の方の昼食会でのスピーチであるが、わが国のカナダ研究推進のポイントであると思っている。（清水建設（株）研究所海洋研究部主席研究員）



日本カナダ学会の現状と展望

伊藤 勝美

日本においてカナダに対する関心が高まる中で、一九七七年五月、日本カナダ研究会が、十一名の研究者をもって呱呱の声をあげた。この研究会は、急速に会員を増やし、年報（『カナダ研究年報』）の発行、日加学術会議の開催、年次研究大会の開催等により着実に実績を積み重ねながら、学際的研究団体としてその存在を確固不動のものとし、改称されて今日の日本カナダ学会となった。

本学会は現在二百数十人の会員を擁し、日本学術会議の登録団体となり、さらに「カナダ研究国際協議会」（ICCS）に加入している。

本学会は、総会の承認を得て年度ごとに活動方針を決定し、理事会がこれを具文化しかつ執行しているが、会員の研究成果を内外に問う『カナダ研究年報』の発行（年一回）、会員向けの広報紙『ニューズレター』の発行（年三回程度）は、本学会の重要な活動である。現在『カナダ関係邦語文献目録』（一九七九年刊行）および会員名簿の増補改訂の作業が進められている。なお本学会は、カナダ文学会、日加協会、関西日加協会などの団体と緊密な関係を保っている。

特に注目に値するのは、北海道、関東および関西における地区（地域）研究活

動の発展であろう。各地区は、その特性を活かして独自に研究会を企画し、機関紙を発行し、あるいは来日したカナダ人学者と随時コロキアム等を持ち、学術交流を行なっている。

ところで六年目に入った日本カナダ学会について、学際的特性をどのように具体的に活かして、「寄り合い所帯」的性格から脱却したらよいか、研究者、専門家の会員とそうでない会員の並存ということから、「専門性」と「啓蒙性」をどう調和させていくか、学部、学生・大学院生のあいだにいかにしてカナダへの学際的関心を喚起し、潜在的ないしは顕在的カナダ研究者の層を厚くしていったらよいか、いかにして地区ごとに研究条件を改善し整備したらよいか、中部（とくに名古屋）や西部などの空白地区をどのようにしてなくしていくか、本学会の財政的基盤をどのようにして確立すべきか——などのさまざまな問題が各方面から提起されてきている。

本年九月二十四—二十五日に奈良市の帝塚山短期大学で第八回年次研究大会が開催されるが、その統一論題部会のテーマは「カナダ研究とは何か——その問題点と可能性」となっている。「カナダ研究とは何か」は、本学会の存在理由に

かわる根源的な問いかけであるが、このテーマをめぐる討論から、右のようなさまざまな問題に対するなんらかの解答ないしは手掛かりが見出されるものと期待される。

終わりに、筆者個人の抱負めいたことを若干列記してみたい。

- ①邦文・欧文の文献に関する短い解説づきの速報の発行、②経済・法律・政治・文芸・社会・宗教などの分野における研究の充実と実際的研究の推進、③④の成果に基づく総合的研究書の発行、④各国のカナダ研究団体との交流の一層の促進、⑤各地区における文献センターの設置、⑥カナダ歴史年表の早期刊行。

日本カナダ学会の今日にいたるまでの発展は、会員各位の熱意、努力、協力、それにカナダ大使館をはじめとする関係各機関の理解・支援に大きく負っていることを衷心からの感謝の念をこめて強調させていただき、筆を置きたい。

（日本カナダ学会会長）

カナダ文学会について

浅井 晃

「カナダ文学会」は、昨年八月に発足したばかりの若い団体であるが、すでに研究例会が開かれ、「カナダ文学通信」も発行されて、ようやく軌道に乗りだしたところである。会の性格は次のように定められている。

(1) カナダ文学をまったく知らない人でも、気楽に参加でき、かつ研究活動の場ともなる会としたい。

(2) 「日本カナダ学会」の下部組織ではないが、情報の交換などで協力関係を保持したい。

(3) カナダ大使館には過度に頼らないでいどの援助をお願いしたい。

組織としては、会長の他四人の幹事が運営に当たっており、事務局は大正大学外国語研究室にある。

第一回の例会では、平野敬一会長からヒュー・マクレンの新作について、渡辺昇会員からポリン・ジョンソンについて、それぞれ報告があった。今後来日するカナダの作家や学者を囲む会も計画されている。

会の目標のひとつとして、日本にあまり知られていないカナダ文学の紹介と普及のため、作品の翻訳出版を念願している。出版社の理解がなかなか得られないのが残念である。

会員の関心となる分野は広く、インディアンやエスキモーの伝説をはじめ、フランス系カナダ文学、日系カナダ人の文学なども、大勢を占める英語系文学と共に、それぞれ読まれている。スザンナ・ムーティ、マーガレット・ローレンスなどの女流作家の研究も盛んであるが、まだまだ未開拓の作家、作品が多く、今後を大いに期待したい。

現在の会員は五十余名。一層の発展のため、各方面の御協力をお願いしたい。（カナダ文学会事務局長、大正大学助教授）

カナダ研究に政府助成

学生、研究者、芸術家を対象に

カナダ政府では、日本におけるカナダ研究を推進するため、大学院学生、大学教員、あるいは芸術家を対象とする留学・研究助成政策を実施している。

奨学・研究資金制度

そのひとつは一九七四年に創設された奨学・研究資金制度。これは、将来日本の大学や研究機関でカナダについて教授または研究する人材を養成するためのもので、日本からはすでに約六十人が資金の給付を受けて、カナダの大学や研究機関に派遣された。対象は、人文科学、社会科学および芸術の分野におけるカナダに関する研究、またはこれらの分野においてカナダが国際的な研究業績をあげているテーマの研究。自然科学、工学、法律学、医学、歯学などは、原則として対象とならない。ただし、経営学修士課程（MBA）への留学は、対象となる。

この制度の対象外の分野でも、ナショナル・リサーチ・カウンシル（NRC）、科学技術振興事業団）の研究員（リサーチ・アシリエートシップ）や自然科学・エンジニアリング研究協会（NSERC）の客員特別研究員（フェローシップ）、医学研究協会の客員科学者に応募できるよ

うになっており、日本から研究に出かける人も多い。（これらの研究員招聘計画については、直接それぞれの機関に問い合わせること。）

外務省の奨学研究資金制度は、次の三つからなっている。

一、スカラシップ

学士または修士の資格をもち（ただし学部卒業予定者を含む）、カナダの大学院で修士号または博士号の取得を希望する三十五歳以下の日本人（芸術関係の場合）はすでに専門家として認められている者が対象で、往復の航空運賃、授業料、医療保険費、それに毎月五五〇ドルの生活費および諸経費が支給される。期間は九月から翌年八月までの一年間だが、成績優秀の場合は延長も認められる。

二、リサーチ・スカラシップ

日本の大学院の修士課程または博士課程に在籍中で、特定のテーマについてカナダの大学院で研究を希望する者が対象。奨学金支給額は、スカラシップの場合と同じだが、延長はできない。

三、フェローシップ

応募資格は、博士号またはそれと同等の業績と資格を有する日本人（芸術家の場合は多年にわたり一流の芸術家として

活動を続け、その業績を認められている者）。航空運賃などのほか、生活費および研究費として、毎月一、一〇〇ドルが支給される。期間は四か月ないし一年間で、延長はできない。

いずれの場合も、応募先はカナダ大使館の文化広報部学術交流課で、応募締め切りは毎年十月末。カナダ大使館内で組織される一次審査委員会が書類審査および面接審査を行ない、その結果に基づいてオタワの最終選考委員会が三月までに受給者を決定する。

カナダ研究助成計画

以上の奨学・研究費のほか、カナダ政府は日本におけるカナダ研究講座を拡大・充実させるため、大学教官を毎年カナダに派遣している。

これは、現在担当している教科にカナダに関する内容を導入し、あるいはカナダ研究のための講座を新規開設すること

カナダ留学案内

カナダには、全国で五十以上の大学（ユニバーシティ）と百五十をこえるコミュニティ・カレッジ（職業訓練もしくは一般教養を目的とする二年または三年制の短期大学）がある。

入学資格や授業内容、学費などは、大学やカレッジによって異なるため、留学希望者はまずそれぞれの学校の案内書や外国留学生に関する資料を取り寄せること。（案内書は在日カナダ大使館にもかなり揃っており、図書室で閲覧できるほか、文化広報

を条件に、カナダ国内でのカナダ研究を資金的に援助しようというもの。期間は三週間以上（上限はない）で、航空運賃のほか、諸経費として一日当り八〇ドル、総額で最低一、七〇〇ドル、最高五、〇〇〇ドルを支給する。

応募締め切りは二月十日。カナダ大使館内に設置される審査委員会の子備審査をへて、カナダ政府外務省が最終審査を行なう。

「カナダ研究講座充実計画」の今年度の研究費受賞者には、次の各氏が決まっている。

篠田知和基・名古屋大学仏文科助教授、村上雅子・国際基督教大学経済学部教授、陣崎克博・広島大学総合科学部教授、実方謙二・北海道大学法学部教授、西賢・神戸大学教授、斎藤静樹・東京大学経済学部助教授、関口礼子・図書館情報大学助教授、萩野芳夫・南山大学法学部教授、大島俊之・大阪府立大学経済学部講師。

部留学係が問い合わせに応じている。）

学年度は、通常、九月から翌年五月までで、願書は入学一年前に提出する。入学は高校や（大学院の場合）大学での成績、英語（フランス語で授業を行なう学校の場合はフランス語）の能力、外国留學生の受入れ枠などによって、許可・不許可が決定される。

入学を認められた者は、入学許可を証明する書類、カナダへ留学するのに必要な資金の存在を示す書類、パスポートなどを揃えて、カナダ大使館査証部で学生許可証を申請する。あとはいよいよカナダへ出発するだけである。

日本の大学における カナダ講座・カナダ研究

筑波大学地域研究研究科

一、「カナダ研究概論」、「カナダ研究演習」、「カナダの地域性と風土」、「カナダの環境と資源」、「カナダの文化と社会」、「カナダの政治と経済」、「カナダ研究特講」。

二、大学院地域研究研究科「カナダ研究コース」の授業は、主として、本学とカナダ政府との協定に基づいて一九七六年よりカナダ政府が派遣する教授が担当している。派遣教授のほかに、当大学地球科学系の正井泰夫教授および東京大学の大原祐子助教授もカナダ講座をもっている。

日本では、近年、カナダに関する講座を設けたり、カナダの大学と交流する大学がふえてきた。当広報部では、いくつかの大学にアンケートを送って、それぞれの大学におけるカナダ講座や交流について紹介していただいた。左にあげた大学や学部以外にも、カナダに関する授業を取り入れたり、カナダの大学と学生や教師を交流しているところは、ほかにもあるはずであるが、今回は十分調査できなかった。なお、他の講座や英文講読の授業などでカナダを扱っている場合は、アンケートから省いた。

アンケート項目

- 一、カナダについてどのような講座がありますか。
- 二、貴大学におけるカナダ研究・講座の生立ちや現状、今後のご計画・抱負について述べて下さい。
- 三、カナダとの教授・学生交流の有無。

三、本学地域研究科からマギル大学、ヨーク大学、トロント大学などの大学院へ留学した、あるいは留学中の学生や、本学からカナダ政府の探訪で訪加した教授がいる。今後も、教授・学生の交流を一層強めていきたい。

関西学院大学

一、一般教養課程総合コース「カナダ」(西尾朗教授ほか)、同社会学部「人文演習—カナダの過去と現在」(西尾朗教授)、専門課程文学部「Topics on the Central Geography of Canada」(カナダ客員教授

と大島襄二教授)、同社会学部「理論社会学特論カナダ研究」(カナダ客員教授と竹安栄子講師)、大学院社会研究科・コミュニケーション論特殊講義「Seminar on Approaches to the Study of Canadian Society」(カナダ客員教授)。

二、一九八〇年初頭、関西学院カナダ研究会が発足し、八一年度より総合コース「カナダ」を開設した。

三、八一年度にレッドコップ教授、八二年度はヒューストン教授と、カナダから客員教授を招き、カナダ研究の課目を学部、大学院に開講している。恒久的な交流計画の実現を希望しているが、まだ具体化していない。

北海学園大学教養部

カナダ研究コース

一、人文科学特殊講義(デビッド・アトキンソン客員教授・カナダ文学、宗教学)、同(筒浦明教授・地理学)、社会科学特殊講義(西沢悟教授・心理学)、外国文学(立谷憲二教授・文学)、英文講読(小池直子助教授・児童文学)、英会話(土橋文子講師・外国事情)。

二、カナダ研究コースは一九八一年四月、一講義、三ゼミで出発、のち英文講読と英会話が加わった。受講生は年間平均六百人前後。カナダの経済、法律などに関する授業の開講も見込まれている。

三、現在、レスブリッジ大学からの客員教授に負うところが大きいが、いずれはカナダへの日本学紹介の機会を作りたい。またぜひ学生の交流も実施したい。

津田塾大学学芸学部国際関係学科

一、カナダ研究(国際関係学科専門科目・地域研究)。担当・竹中豊。

二、馬場教授(現大阪大学)の在任中から続いている講座で、今年度は前期でカナダの歴史的背景、後期は主にエスニシテイの問題を扱う。

慶応義塾大学国際センター

一、国際センター外国研究講座のひとつとして、専門課程および大学院学生を対象とするカナダ講座(担当はカナダ政府派遣の教授)が設けられている。内容はカナダの政治、経済、歴史など。

二、一九七六年にカナダ政府の厚意でカナダ講座が寄贈された。(トルドー首相が本大学を訪れ、名誉博士号が授与された)八三年度は、四月にラバル大学のカーティス教授による「カナダの社会と政治」および「カナダの社会・行政研究セミナー」が開講された。今後は、学部等にカナダに関するより多くの科目が設置され、またカナダ研究の教員が輩出するよう望まれる。

三、本塾大学学生団体のひとつである「国際関係会」が、以前から、ビクトリア大学の学生団体との間で学生交換計画を実施しており、大学ではビクトリア大学からの交換学生に対し、学費を免除するほか、滞在費の一部を補助している。

国際基督教大学教養学部

一、カナダ政府派遣教授による特殊講

義(昨年はミラー教授による「Canadian Society and Politics」)。今年はカーティス教授の予定。

二、一九七六年以来、毎年、秋学期二単位の講座を開講しており、今後もこれを継続したい。

三、特定の大学との交換計画はまたないが、一、二の大学から打診があり、可能性を検討している。ユナイテッド・ナショナル・オブ・カナダから各員教授一人が派遣されている。現在は数学専攻のアレン・ゴールド博士が滞在中。

立教大学文学部史学科

一、専門課程「西洋史特講5 カナダ史」(一九八〇、八二年度、担当大原祐子助教授)。富田虎男教授が担当する年度には、アメリカ合衆国史を主としながら、カナダ史にも言及。

二、二、三年ごとにカナダ史の講義を

専門課程で続けてゆき、学生のカナダ研究への関心を喚起したい。すでに、大学院課程で二人のカナダ史専攻者が現われている。

富山大学教養部

一、本年度後期より、カナダに対する正しい認識を深めることを目的とした「カナダ研究コロキウム」(担当・小島寛教授)を開設する。

神戸大学工学部

三、一九八〇年にトロント大学理工学部と、共同研究活動、科学上の教育と研究の領域における情報交換、教官の交換、学部学生、大学院生の交換を推進する協定を結び、実施している。

上智大学

一、コンラッド・フォルタン教授が一

般教育科目でカナダの英文学を担当しているほか、スーザン・モルノー講師が仏文学科でフランス系カナダ文学を教えている。

二、フランス系カナダ文学は、十年前、フォルタン教授のもとで開講されたが、のちモルノー講師に受け継がれ、フォルタン教授は一九八一年からカナダ史とカナダ英文学を交互に講義している。

上智大学カナダセンター

カナダセンター(主事コンラッド・フォルテン師)は、一九五八年、在日カナダ大使館から寄贈された百五十冊の書籍と在外カナダ人の寄付をもとに、日本とカナダの友好関係を増進させるために設立された。

主な活動は学生による研究会、手工芸品の展示、カナダ文化に関する一般向け月例講演会、学生のカナダ夏期旅行、移住希望者への情報提供、在日カナダ人教育者とのミーティングなど。図書室もあり、また「カナダ研究シリーズ」やニュースレターも発行している。

帝塚山短期大学

三、ブリテイッシュ・コロンビア州のコキトラム・カレッジと提携しており、毎年五か月間、英米語コースの学生がそこに留学してカナダ体験をしているほか、同カレッジから四人の講師がきて英語を教えている。また食品科学コースの学生

は約四十日間、ブリテイッシュ・コロンビア工科大学でカナダの食品事情について講習を受けている。

東京大学教養学部第三教養学科

一、カナダ政府派遣教授によるカナダ研究講座(週一回)。

二、一九八一年にカナダ講座が設けられて以来、派遣教授(今年度はカーティス教授)による講義が続いている。将来は、できればオーストラリア研究、カナダ研究と並列して充実させたい。

道都大学(紋別市)

三、一九八〇年に州立カルガリー大学と姉妹提携して以来、当大の建築学部および福祉学部、州大の環境デザイン学部および社会福祉学部との間で、教員を交流し、それぞれの国における状況を講義している。

北海道大学法学部

一、まだない。
二、本学部教官を主要メンバーとする北海道カナダ法研究会が昨年発足した。基礎資料の整備充実に努力し、長期にわたる将来の研究の基盤を作りたい。

三、一九七九年にアルバータ大学の準教授が本学部滞在中、共同研究に従事した。また本年四月には、ブリテイッシュ・コロンビア大学法学部との間で共同研究・学術交流計画の推進を申し合わせた。本年度は相互に三人ずつ、教官を交換、派遣したいと考えている。



6 学長がカナダ視察へ——日本の大学におけるカナダへの認識を深めるため、カナダ政府はこのほど、6つの大学の学長をカナダに招待した。一行は、バンクバー、オタワ、キングストン、モントリオール、トロント、エドモントンを訪問、カナダの諸大学の学長や、連邦政府および州政府の学術担当者とのカナダの教育制度や大学教育について意見を交わした。写真は左から、1人おいて有江幹男(北海道大学)、福田信之(筑波大学)、柳瀬陸男(上智大学)、頼實正弘(広島大学)、城崎進(関西学院大学)、平野龍一(東京大学)の各学長と、P・バーンズ、ブリテイッシュ・コロンビア大学法学部部長(中央)およびカナダ外務省のジョー・スローン氏(左端)。

地下鉄道と

アンクル・トム



アメリカにおいて南北戦争をひき起こし、奴隷制度を廃止させる原動力になったといわれるH・B・ストウ夫人の「アンクル・トムの小屋」。その中で一家離散の運命から逃がれようと、奴隷のジョージ・ナリスは、妻子を連れ、主人公アンクル・トムに別れを告げて逃げだす。目ざす先はカナダ。一家は、いろいろな困難に出会いながら、途中親切な人々に助けられ、どうにかカナダの小さな町にたどり着く。

「ひとたびそこに足を触れば、いかなる奴隷制度の呪文でもたちまちその魔力を失う」（山屋・大久保共訳書）その岸辺から、一家は「避難所を探し求めてやってくる追放された人々や、さまよい歩く人々」に手をさしのべるある宣教師の住居へ案内される……。

この物語にあるように、南北戦争前のアメリカでは、北部へ逃げ込んだ奴隷が南部へ連れ戻されないように、逃亡奴隷を助ける地下組織ができていた。「地下鉄道」と呼ばれたこの組織は、南部の農場から逃げてきた奴隷に隠れ場所、お金、

食糧、衣服などを与え、北部のいわゆる「自由州」や、それよりもっと安全なカナダへ導いていった。逃亡奴隷をかくまってくれる家は駅、ひとつの駅から次の駅へ橋渡しをする人は「車掌」、また逃亡奴隷自身は「貨物」と呼ばれた。奴隷の逃亡を助けるのももちろん違法で、駅員も「車掌」も自らの逮捕または命をかけての仕事だった。

アメリカ南部の奴隷がカナダへ向かったのは、それなりの理由があった。当時のカナダはアッパー・カナダとローワー・カナダという二つの英国植民地からなっていて、アッパー・カナダ（現在のオンタリオ州一帯）では、アメリカの独立戦争で英国側を支持した人たちが、奴隷をとらえて逃げてきていた。しかし、奴隷制に反対する初代英国総督ジョン・シムコーの熱意によって、早くも一七九三年には、これ以上アッパー・カナダに奴隷を導入することを禁じ、すでに奴隷となっていた者の子供は二十五歳に達した時に解放されるという法案が、議会で採択され、奴隷制は事実上廃止された。英帝国で奴隷制が廃止されたのは一八三四年だから、カナダの奴隷廃止はかなり早い。

カナダの奴隷解放は、一八一二年の英米戦争から帰ってきた兵士たちを通じて、南部各州の奴隷の耳に届いた。やがて、ナイヤガラ川近辺で、南部から逃げて来た黒人の顔が見られるようになり、その数はだんだん増えていった。アメリカからカナダへ逃げてきた奴隷の数は、一八

五〇一五年だけで五千人、全体では二万五千から四万人にのぼるといわれている。

「アンクル・トムの小屋」に話を戻すと、信仰心の厚い主人公トムは、数奇な運命のもと、南部へ売り飛ばされ、そこで気の荒い主人になぶり殺されてしまう、という筋書きになっている。

ところが、ストウ夫人がアンクル・トムのモデルに使ったといわれる人は実際にいて、妻と子供四人を連れてカナダへ逃げ、そこでやはりかつては奴隷であった人々の共同開拓村を創設したという。



「アンクル・トム」のモデルといわれるジョン・サイア・ヘンソン

その男の名前はジョサイア・ヘンソン。ヘンソンの半生は、なるほど、アンクル・トムのたどったそれと酷似している。

メリーランドで一七八九年に奴隷として生まれたヘンソンは、十八歳でキリスト教徒になり、二十二歳で結婚して十二人の子供をもうける。メソジスト正教会の説教師となり、他の黒人奴隷の監督を任されるほど主人から信頼された。しかし、

ある日、主人のイトコのお伴でニューヨークへ行くことになったヘンソンは、自分が売られに行くんだということを知っている。ヘンソンは家族と共に国境を越えて、現在のアッパー・カナダへ逃げ込んだ。一八三〇年のことであった。

カナダに着いたときのことを、ヘンソ

ンは後年、次のように述懐している。「カナダの土を踏んだとき、私は思わず地面に身を投げ出して、爆発しそうな狂喜に任せていろいろおどけたまねをしました。それを見ていた人たちはびびくりして、たまたまそこに居合わせたワレン中佐などは私が発作でも起こしたかと思っ、どうしたんだと聞きました。私はぴよんと立ち上って言ったものです。私は自由だ、と。中佐は『これは驚いた。自由になったら人は砂の上で転げ回るなんて、これまで知らなかったよ』と大声で笑ったものです。」

カナダへ着いたヘンソンは、やがて説教師から組織者へ転じる。彼は、当初、教区の人々に土地を貸してタバコや小麦の作り方を教えていたが間もなく、アメリカの奴隷反対運動で活躍していたハイラム・ウィルソンと共に金を集め、オンタリオ州のドーン（「夜明け」の意味）というところにおよそ八百平方キロメートルの土地を買って、逃げてきた人々のための農業学校を開く。その学校の周囲には五百人ばかりの人々が村落を作り、約六千平方キロメートルの土地でタバコ、小麦、燕麦などを栽培した。

ストウ夫人がヘンソンに会ったのは、一八四九年だったという。「アンクル・トムの小屋」が新聞に連載で発表されて大反響を呼んだのは一八五一年から翌年にかけて（本が出版されたのは一八五二年）、南北戦争が起きたのは一八六一年、そしてアメリカ合衆国で奴隷が解放されたのは一八六三年のことである。（Y）

箱根町とジャスパー

観光地同士のきずな

田中 喜一郎

一九七一年十一月末、われわれ箱根町観光協会の代表三人がエドモントンよりCN鉄道にてジャスパー駅頭におり立つた時、あたりは重い冬のとほりが立ちこめていました。ジャスパー駅では、ジャスパー・パーク・ロッジの支配人ハーツ・ピクリングさん、商業会議所会長のポーターさん、ジャック・ピエーさん等の出迎えをいただき、早速ジャスパー・パーク・ロッジへ向かいました。パーク・ロッジは、オアシスのため閉鎖されていましたが、われわれのため特別に歓迎の準備がされており、当時の州政府観光大臣であったボン・タウリング夫妻をはじめジャスパーの有志の方々が大勢、われわれの到着を待っていて下さいました。お互いに初対面であり、かつプロクシな英語にもかかわらず、数分のうちに長年の知己のようにうちとけて、箱根のこと、ジャスパーのこと等を、時折り通訳の小

泉君のヘルプを受けながら話し合い、夜の更けるのも知らぬ程でした。

それは本当に、暖かい心の触れ合いに満ちた、忘れ得ぬ数時間でした。

翌朝、眠りから目覚めたときの心地よ

さ、われわれはジャスパーの素晴らしき

に心を打たれ、帰国したら早速、箱根町

に対してジャスパーと姉妹観光地の盟約

締結を進めるよう進言しよう」と決めま

した。幸いにして、町当局の理解を得て、翌

一九七二年、われわれの希望が実現しま

した。そして再びジャスパーを姉妹観光

地盟約締結のため訪れた時、町はカナダ

建国百年祭の最中でした。

建国祭とわれわれの歓迎を兼ねた盛大

なパレード、和やかな中にも威厳に満ちた締結式典……未だに私の脳裏にはつきりと刻まれています。一九七七年には、箱根ライオンズクラブとジャスパー・ライオンズクラブが年間交互に相手方を訪問し、交流を続けています。ジャスパーの皆さんに接すれば接するほど、皆さんの心の暖かさに魅せられ、特にピューさん夫妻には一か月程私の娘

がホームステイをさせていただいたこともあり、本当に外国の親取のようなおつきあいをしています。

昨年七月、盟約十周年式典に箱根町観光協会会長として、またライオンズクラブ

盟約五周年記念に箱根ライオンズクラブ

会長として、十年ぶりにジャスパーを訪

問する機会を得ました。

パーク・ロッジで開催された十周年記念

パレード、ライオンズクラブの方々の

野外パレード等、数日間はまだたく間に

過ぎて別れの朝がきた時、ピューさんの

奥さんの目に宿った真珠のような涙。そ

の美しい涙を見た時、私は、われわれ

一人一人がそれぞれの立場で、この素

晴らしい心の絆を大切に育て強化して行

かなければならない、と痛切に感じまし

た。

自然の美しさ、心の暖かき、共通の理

念パレード、ライオンズクラブの十周年記念パレード



ジャスパーで開かれたライオンズクラブ盟約5周年記念パレード。右側が筆者。

念の下に結ばれたこ

の絆が、それぞれの

住民の配慮と努力により永

遠に続くことを心より念じ

ております。

(箱根町観光協会会長)

葉樹……総面積一平方万余キロのジャス

パー国立公園は、世界的に知られた観光地

に変化に富んだこの風光明媚な国立公園は、

観光、登山、ゴルフ、釣り、乗馬、カヌ

ーなどに最適で、日本からも訪れる人が

後を断たない。

日本の代表的国立公園である箱根がこ

のジャスパー(人口約四、二〇〇人)、と

姉妹縁組したのは、一九七二年七月の

ことである。その前年、ジャスパー・

パーク・ロッジの支配人ピクリング氏が来

日、箱根町長に提携を申し入れていた。

箱根町当局とジャスパー商業会議所(ジ

ヤスパー)は全域が連邦政府直轄の国有地

となつているため、自治体組織はない

の間で話ほとんどと進み、姉妹提携が

成立した。以来、学生や市民の交流が続

いている。

